

宗教とは何か

【4】お遍路さんの様に

1) 武田勝頼を偲んで 新府城～田野

2016年5月1日(日)

【1】はじめに	1月 1日(金)
【2】宗教探索の旅	
1) 神道 お伊勢まいり	2月27日(土)
2) 仏教 身延山	4月29日(金)
3) キリスト教 (東京)	6月
4) 天理教 (天理)	8月
5) イスラム教 ()	10月
【3】走れ 42. 195km	
1) 訓練状況	5月
2) 結果	11月
【4】お遍路さんの様に	
1) 武田勝頼を偲んで 新府城～田野	5月1日(日)
2) 大月～富士吉田～河口湖	8月
3) 大月～都留～秋山	11月
【5】サムシング・グレート	
1) それって何？	3月12日(日)
2) 宗教とサムシング・グレート	9月
【6】まとめ	12月

1. お遍路さんの様に 徒歩巡礼の旅リマインド（折乃笠公平）

「お遍路」とは、弘法大師（空海）の足跡をたどり、四国の八十八ヶ所の霊場を巡拝すること。

小生が最も尊敬している方 稲盛和夫氏は、胃がん手術後の1997年に65歳で得度（仏教における僧侶となるための出家の儀式）。

2005年、四国にて托鉢（僧が修行のため、鉢（はち）を持って、家の前に立ち、経文を唱えて米や金銭の施しを受けて回ること）を実施。

稲盛氏は托鉢中に公園清掃中の決して裕福には見えないおばあさんから、なけなしの金銭とお坊様への感謝の言葉を受けた事が一生忘れられないという。

小生はこのお話を知った時、金銭的にさぞ豊かであろう世界的な経営者稲盛和夫氏の心の豊かさに、涙が出る程感動した。

まさしく、宗教とはこの様なものでなくてはいけないと思う。

小生は、少しでも見習って、お遍路さんの様に旅に出る。

2. 今回の旅の目的（折乃笠公平）

『おぼろなる 月もほのかに 雲かすみ 晴れて行くへの 西の山のは』
勝頼の辞世の句。

武田家を、夜明けには消えていく雲や霞に例えている、物悲しい句である。

だが、勝頼の人生をここまで悲惨なものにしたのは、決して勝頼自身だけの失策ではなかったはずだ。

小生は、お遍路さんの様に、武田勝頼を偲んで、武田勝頼の逃亡を辿り、武田勝頼の思いを察し、武田勝頼が最後神仏に頼る理由を知る。

3. 武田勝頼紹介（インターネットより）

信玄は御寮人を側室に迎えたのは絶世の美女だったからではなく、諏訪郡を統治する手立てとして神長の意見に心を強く動かされた。

信玄はあえて勝頼の子を信玄の養子にした。武田信勝である。

勝頼は甲府ではよそ者であった。勝頼の形儀は信玄よりも謙信に似ている。

長篠戦で信玄が大切にしていた武功派の家老衆が消え去った。

諏訪勝頼のまま信玄の死を向えた。

数奇な星の下に生まれた勝頼にとって唯一無念だったのは信玄の子でありながら甲州の人々から疎外されたことであろう。勝頼は甲州の人々の冷やかさ、自分の求心力のなさをいやというほど思い知ったに違いない。

天正 10 年(1582 年)2 月には、信玄の娘婿で外戚の木曾義昌が新府城築城のための負担増大への不満から織田信長に寝返る。勝頼は外戚の木曾の反逆に激怒

し、人質を惨殺した上で即座に木曾討伐の軍勢を送り出した。しかし雪に阻まれ進軍は困難を極め、地理に詳しい木曾軍に翻弄された。その間に織田信忠が伊那方面から、金森長近が飛騨国から、徳川家康が駿河国から、北条氏直が関東及び伊豆国から武田領に侵攻してくる(甲州征伐)。そして勝頼にとって間の悪いことに、織田軍の侵攻の始まった2月14日に浅間山が噴火した。当時、浅間山の噴火は東国で異変が起こる前兆だと考えられており、さらに噴火のタイミングが朝敵指名および織田軍侵攻と重なってしまったために、武田軍は大いに動揺してしまったと考えられる。

これらの侵攻に対して武田軍では組織的な抵抗ができなかった。勝頼の叔父・信廉は在城する対織田・徳川防戦の要であった大島城を捨て甲斐に敗走し、信濃伊那城においては織田軍が迫ってくると城主・下条信氏が家老によって追放され、織田軍を自ら迎え入れてしまった。信濃松尾城主の小笠原信嶺、駿河田中城主の依田信蕃らも織田・徳川連合軍の侵攻を前に戦わずして降伏する。さらに武田一族の重鎮である穴山信君までも勝頼を見限り、徳川家康を介して織田信長に服属を誓った。これにより武田氏に属する国人衆は大きく動揺する。

この情報に接した武田軍の将兵は人間不信を起こし、疑心暗鬼に苛まれた将兵は勝頼を見捨て、隙を見ては次々と逃げ出したのである。

【今回対象】

同年3月、勝頼は未完成の新府城に放火して逃亡した。勝頼は小山田信茂の居城である岩殿城に逃げようとした。しかし、小山田は織田信長に投降することに方針を転換し、勝頼は進路をふさがれた。後方からは滝川一益の追手に追われ、逃げ場所が無いことを悟った勝頼一行は武田氏ゆかりの地である天目山棲雲寺を目指した。しかし、その途上の田野でついに追手に捕捉され、嫡男の信勝や正室の北条夫人とともに自害した(天目山の戦い)。享年37。これによって、450年の歴史を誇る名門・甲斐武田氏は滅亡した。

4. 行動内容 (①～⑧は武田勝頼逃亡順序)

1) 日時

5時53分:大月駅発 中央本線

7時03分:新府駅着

徒歩 新府駅→①新府城→②武田八幡神社→③願成寺→韮崎駅 12km

11時06分:韮崎駅発 中央本線

11時44分:酒折駅着

徒歩 酒折駅→④甲斐善光寺→酒折駅 3km

12時49分:酒折駅発 中央本線

13時09分:勝沼ぶどう郷駅着

徒歩 勝沼ぶどう郷駅→⑤勝沼氏邸→⑥大善寺→⑦笹子峠→⑧田野

10km

16時30分:バスにより甲斐大和駅着 全徒歩距離 25km

その後:家内が車でお迎え→甲府くら寿司で反省会

2) 武田勝頼逃亡ルート



5. 徒歩の旅レポート

色の区分 茶： 歴史的検証結果、日付は1582年(歴史学者)

紫： 武田勝頼の逃亡経路と気持ち(折乃笠の推察)

緑： 折乃笠の探索経路と考察

黒： インターネット情報

1) 1582年3月3日

(1) 新府城～願成寺



【新府城】

武田勝頼は新府城に火を放った。

新府城を放棄し、岩殿城の小山田信茂を頼り、逃れる。

史料上の初見は、天正9年(1581年)に家臣の真田昌幸へ普請を命じたものとされる。

天正3年(1575年)の長篠の戦いで織田・徳川連合軍に武田方が敗北した後、勝頼は領国支配を強化し、河内地方から織田・徳川領国と接する駿河を領する穴山信君(梅雪)が織田軍の侵攻に備えて七里岩台地上への新たな築城を進言したという。

築城は天正9年(1581年)から開始され、年末には勝頼が躑躅ヶ崎館から新府城へ移住している。



新府城へ続く石段



物悲しい新府城跡

新府城もこれまで。新府城では織田軍には勝てない。小山田信茂がいる岩殿城ならば関東一の岩山の要塞。籠城により何とかなるかもしれない。源氏の血を引く名門武田家を潰すわけにはいかない。しかし、自分の城を自分の手で火に掛けるのは僂びない。

現在の新府城跡は人一人いなく、物悲しい。
武田勝頼の弱体化を思わせる。

【新府城～武田八幡神社途中】

遥か向うに八ヶ岳の壮大な姿が見える

諏訪の地で生まれ、甲州の地を守ってきた。
常に八ヶ岳がわしを見守ってくれた。
感謝申し上げます。

勝頼は八ヶ岳を見て生まれ故郷の諏訪を想ったに違いない。



遥か向うに八ヶ岳

【武田八幡神社】

逃亡途中で武田勝頼の継室・北条夫人が戦勝祈願をした。

甲斐国志は当宮の別当寺である法善寺(南アルプス市)の記録に基づき、822年に空海の夢の中で八幡大菩薩が武田郷に出現したため神祠を構えたのを起源としている。なお、同書では日本武尊の子である武田王が御殿を設けた事が武田の地名の由来であり、武田王が館の北東の祠を館内に移して祀ったのが武田武大神の起源としている。



霊気漂う重厚な神社

甲斐国社記・寺記によれば、清和天皇の頃に奉幣と社領の寄進が行なわれた後、武田信義が武田八幡宮を氏神とし、社頭の再建などを行なったという。

歴代の甲斐国司も造営を行なったとされるが、戦国期に武田晴信(後の信玄)が天文10年(1542年)に大檀主として嫡子である武田義信とともに再建したとあるのが、確認されている中で古い造営記録である。この造営は国主となった晴信の最初の事業でもあった。



本社 歴史を感じる

天正10年(1582年3月3日)には、織田信長の甲州征伐に際して、武田勝頼の妻・北条夫人が勝頼の武運を祈って祈願文を捧げた。この祈願文は掛軸に仕立てられ、県指定の有形文化財となっている。

武田氏の滅亡後、甲斐の領主となった徳川家康は、天正11年(1583年6月8日)に社領を安堵している。

良妻・北条夫人に感謝申し上げる。

武田八幡神社は靈気が漂う重厚な神社であった。
北条夫人は織田軍に本当に勝てるとは思ってもなく、あくまでも勝頼を元気づけるために祈願したのだと思う。

【願成寺】

逃亡途中、甲斐源氏の祖・武田信義の墓所を礼拝した。

甲斐国志に拠れば、願成寺は源清光の子で甲斐源氏梁・武田氏始祖の武田信義が開祖であると言われる。鎌倉時代に甲斐源氏の一族は源頼朝の肅清を受けて没落する。戦国時代には守護・武田氏により中興され、戦国期に住職となった願成寺俊虎(がんじょうじ しゅんこ)は武田晴信(信玄)の甥にあるとされる。

甲斐源氏の開祖・信義公に誓う、名門武田家を守り抜く。

武田家は清和天皇の血を引き、源頼朝とは血縁関係にある名門である。

次ページに家系図を示す。

織田、徳川とは格が違っている。



武田氏の始祖・武田信義が祀られている



静寂の中の本殿



韮崎市役所前にある武田信義像

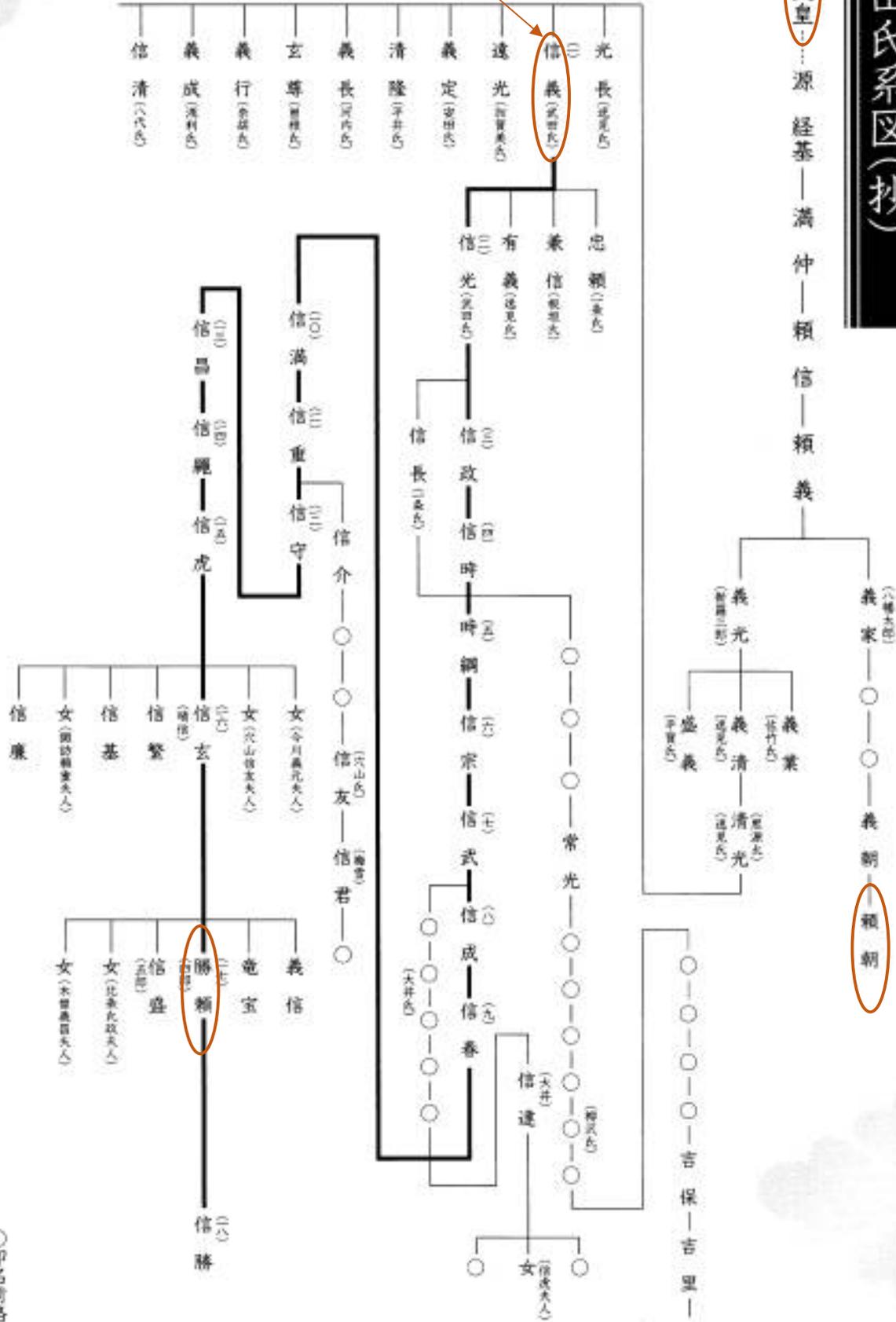
武田氏系図(抄)

清和天皇

源 経基 — 満仲 — 頼信 — 頼義

義家 — 義朝 — 頼朝

頼朝



【武田八幡神社～甲斐善光寺 釜無川】

武田勝頼らが振り返ると燃える新府城が見えた。
彼らは涙を流したとされる場所である。

.....

燃える自分の城を見るのはさぞ辛かったであろう。



釜無川 右に新府城の森が見える

(2) 甲斐善光寺



武田勝頼一行は甲斐善光寺に立ち寄って安全祈願をした。
すぐ近くの躑躅ヶ崎館(甲府城)には寄っていない。

甲斐善光寺は永禄元年(1558年)、甲斐国国主武田信玄によって山梨郡板垣郷(甲府市善光寺)に創建された。

天文10年(1541年)武田信玄は信濃侵攻を本格化させ、北信濃の国衆を庇護する越後の上杉謙信と衝突し、北信濃において五次に渡る川中島の戦いを繰り広げる。

天文24年(1555年)の第二次合戦では戦火が信濃善光寺に及び、善光寺別当の栗田氏は武田氏に味方しており、これ以前から接触があったと考えられている。

同年10月には駿河国・今川義元の仲介により武田・上杉間の和睦が成立し、謙信は信濃善光寺・大御堂本尊の善光寺如来や寺宝を越後へ持ち帰り、直江津に如来堂を建設した。



甲斐善光寺の壮大な総門



綺麗な姿の本寺院

これに対し、信玄は弘治3年2月15日に信濃善光寺北西の水内郡・葛山城(長野市)を落とし一帯を勢力下に置くと、信濃善光寺本尊の阿弥陀如来像や寺宝を甲斐国甲府へ移転させ、栗田氏らも甲府へ転居した。善光寺別当栗田氏も武田方と上杉方に分裂している。

同年9月15日に善光寺如来は甲斐に到着し、甲斐の領民は狂喜したという。

わしは、生前の父上・信玄公に好かれていなかった。

しかし甲斐善光寺は父上信が創建した寺院である、ここに名門武田家を守り抜く決意を示す。

勝頼は、武田家の本陣である躑躅ヶ崎館(甲府城)には寄らなかった。

勝頼は甲府ではよそ者であることを自覚していたのだと思う。

(3) 勝沼氏邸～田野



【勝沼氏邸】

血縁関係にある勝沼氏邸に寄る。

武田信虎(信玄の父)の弟、五郎信友が居住し勝沼氏を称したという。大永六(1526)年の境川村石橋八幡社棟札にも武田信虎と並んで名が見え、その勢力の大きさが伺われる。

勝沼信友は天文四(1535)年北条氏綱との戦いで都留郡で戦死した。

信友の跡は五郎(丹波守)信元が継ぎ、信濃大門峠の合戦、上信国境の笛吹峠の合戦、信濃海野平の合戦、信濃深志城攻略などに従軍している。

永禄三(1560)年、勝沼信元は逆心を企てたとして武田信玄に誅殺され、勝沼氏は断絶した。兩宮家に嫁していた妹は離縁され、勝沼の柏尾山大善寺に入り理慶尼と号した。

血縁関係だが信玄公と断絶状態の勝沼氏邸に寄る。

今では、途絶えがちな武田の血を少しでも繋いでおきたい。

この時の勝頼にとって血縁関係は藁にもすがる存在だったのだと思う。

【大善寺】

武田勝頼らは新府城から大善寺まで約35kmの距離を1日で来た。

大善寺には武田一族(信玄のいとこ)理慶尼がいた。

その夜、国宝・薬師堂で武田勝頼・信勝・北条夫人・理慶尼の4人が一緒に寝た。

正確な創建年代は不明だが、本尊である薬師如来像の様式などから創建は平安時代前期と考えられている。

寺伝では養老2年(718年)、行基が甲斐国柏尾山の日川溪谷で修行した時に、夢の中に葡萄(甲州ぶどう)を持った薬師如来が現われ、満願を果たし、葡萄を持った薬師如来像を建立したことが当寺の起源であるとされている。

甲州葡萄の始まりは行基が法薬として葡萄の栽培法を村人に教えたことであるともいわれている。



勝沼氏邸 入口



勝沼氏邸跡 壮大な広さが伺える



大善寺 山門

鎌倉時代には鎌倉幕府が甲斐・信濃国において棟別銭を課して本堂再建された。

戦国時代には天文 19 年(1550 年)に郡内領主の小山田信有が二子を連れて参詣を行っている。

天正 10 年(1582 年)3 月、勝頼は逃亡途中で大善寺に立ち寄り、戦勝を祈願している。

その後、勝頼・武田氏の滅亡を記した記録に『理慶尼記』がある。



勝頼一行と理慶尼が共に寝た薬師堂

笹子峠を超える前に血縁関係にある理慶尼殿とお会いできたことは今生の喜びである。岩殿城で落ち着いた時、必ず御呼び致します。

理慶尼は、この時すでに武田家の終焉を予測していたはず。勝頼の本心は、わからない。

2) 3月7日

(1) 笹子峠

武田勝頼と嫡男・信勝一行は岩殿城を目指すが、その途中笹子峠で小山田信茂の離反に遭った。『理慶尼記』小山田信茂は峠の木戸を閉め離反する。

最後の家臣・小山田信茂にしてもか。

小山田信茂にして、思いは如何に？



運命の道 笹子峠入口

3) 3月11日

織田信長・徳川家康連合軍の甲州攻撃開始。武田領国への侵攻が行われた。先陣として滝川一益が進軍してきた。真田昌幸は武田勝頼に甲斐国を捨てて上野国吾妻地方に逃亡するように進言し岩櫃城に迎える準備をしていた。



遥か先に笹子峠 勝頼一行は超えられなかった

徳川家康と穴山梅雪は織田信忠に面会し、今後の相談を行った。

武田勝頼一行は天目山栖雲寺の手前にある田野で滝川一益隊に対峙した。700名いた家臣も43名になっていた。

4)3月12日

笹子峠(大月市)を郡内への入り口を封鎖した地としている。
理慶尼が『武田滅亡記』を残した。
大善寺薬師如来の像の後ろに展示されている。
景德院前[当時はなかった]・・・挟み撃ちの中心。
後、田野寺景德院:徳川家康が建てた。
武田勝頼、北条夫人、武田信勝の墓がある。



勝頼一行最後の地 田野 景德院

【景德院】

天正10年(1583年)3月12日、甲斐国国主・武田勝頼は
田野において自害、武田家は滅亡した。
同年6月、本能寺の変により発生した天正壬午の乱を経て
甲斐は三河国の徳川家康が領する。
天正壬午の乱において武田遺臣の一部は家康に臣従し、同
年7月に勝頼と家臣ら殉死者の菩提を弔うため、田野郷一
円を寺領として寄進し、景德院を創建した。



信勝 勝頼 北条夫人の墓

もし父上がご存命であったら、こんなとき、どうなされていたであろうな。
父上が築き上げたこの国をわしは滅ぼしてしまうのか。
家臣に裏切られて何度も何度も、もう駄目かと思ひ、どうしようもない心情だった
けれど、父の築いた武田家を何とか滅ぼしたくなかった。
無念！
最後、諏訪に帰りたいかった。

4)3月24日

信長は戦後に残党狩りを行い甲府で多くの武田家臣を処刑しているが、『甲陽軍鑑』等によれば、甲斐善光寺では勝頼従兄弟の葛山信貞、郡内領主・小山田氏の当主小山田信茂、小山田一族の小山田八左衛門尉、山県同心の小菅五郎兵衛らが処刑された。

6. 武田勝頼が最後神仏に頼った理由 (折乃笠公平)

武田家は信玄の祖父信繩の頃から、軍神である諏訪大明神を信仰していた。
具体的には旗指物に「諏訪南宮上下大明神」を使い、自らは諏訪大明神の守護を受けたものであることを前面に押し立て、信濃を侵略したことからも信玄の諏訪大明神への信仰心の深さを感じ取れる。

武田信玄は天台宗に帰依し、晴信という名前を「信玄」という僧号に代え、天台宗の僧侶となっている。

よって武田家の信仰は諏訪大明神と天台宗である。

武田勝頼の本当の信仰は、生まれ故郷の諏訪大明神ではないかと思う。

ただし、それは宗教心によるものではなく、自分の生い立ち、生活環境、周りの人々との関係により信仰が深まったと考える。

最後、どんなに諏訪に帰りたかったか、深く察することができる。

1) 信玄と勝頼の関係

(1) 武田家と諏訪家

しばらく上社諏訪氏と下社金刺氏との対立が続いた。

諏訪頼重と武田信虎は同盟軍を結んだ。

諏訪頼重は関東管領上杉憲政と単独講和を結んで領土分割協定を締結した。

その後信玄の怒りをかい、自害。

(2) 勝頼と信玄の遺言

信玄は御寮人を側室に迎えたのは絶世の美女だったからではなく、諏訪郡を統治する手立てとして神長の意見に心を強く動かされた。

信玄はあえて勝頼の子を震源の養子にした。武田信勝である。

勝頼は甲府ではよそ者であった。

勝頼の形儀は信玄よりも謙信に似ている。

長篠戦で信玄が大切にしていた武功派の家老衆が消え去った。

2) 勝頼の人間像

(1) 悲しきかな勝頼

諏訪勝頼のまま信玄の死を向えた。

数奇な星の下に生まれた勝頼にとって唯一無念だったのは信玄の子でありながら甲州の人々から疎外されたことであろう。勝頼は甲州の人々の冷ややかさ、自分の求心力のなさをいやというほど思い知ったに違いない。

(2) 武田勝頼をめぐる女たち

◆母 諏訪御寮人

輝くばかりの美しさ。

父頼重の切腹後信玄の側室となった。

勝頼はそんな母の諏訪に寄せる深い思いを注ぎ込まれながら育った。

勝頼10歳、母の死。母23歳。

◆妻 遠山夫人

勝頼 17歳で遠山城主となる。

織田信長の姪が花嫁。

信玄が持っている木曾と境界になる

勝頼はこの初々しい花嫁を双手で受け止めいつくしんだ。

信勝を産み落とすとそのまま亡くなる。享年16歳。

◆妻 北条夫人

勝頼 32歳。北条氏政の妹が勝頼を訪ねてきた。14歳。

勝頼は心底愛した。

北条夫人は勝頼の人間味に触れた。

7. まとめ（折乃笠公平）

今回、お遍路さんの様に、武田勝頼を偲んで、武田勝頼の逃亡を辿り、武田勝頼の思いを察し、武田勝頼が最後神仏に頼る理由を知るために旅をした。

“お遍路さんの様に”とは、亡き人の冥福を願って巡礼をするということであり、目的は達成できたと思う。

武田勝頼公、あまりにも悲運の武将であった。

改めて御冥福を祈る。



田野の近くの甲斐大和駅裏の武田勝頼公像
あまりにも奥まった所にあり、訪れる人はいない
生前の勝頼公の様でとても悲しかった